

特報

講演・討論会

日本の「仕事の鬼」と中国の「酒鬼」

講師 富田 昌宏 氏

(元外務省外交史料館長)

1978年10月の鄧小平来日時に鄧小平の通訳を務めたベテラン外交官、富田昌宏さんが2014年5月、日本橋報社から新著『日本の「仕事の鬼」と中国の「酒鬼」』——漢字を介してみる日本と中国の文化』を出したのを記念して、6月3日夜に東京駅近くの八重洲ブックセンター本店ギャラリーで講演会を開催しました。「協議」が日本語では話し合うことを意味するのに、中国語では「合意」

の意味であることを知らず、通訳の現場で中国側から「協議」の訳について「本日は何も合意していない」との発言があり困惑した経験など、日本語と中国語の同音異義の怖さや、一見無関係に見える「八仙人」と「七福神」を由来まで遡ると共通点がわずかに見えることなど、興味深い話が満載。いずれも本の内容をピックアップして紹介したものでした。講演の概要をお届けします。



2014年6月3日、東京駅近くの八重洲ブックセンター本店ギャラリーで開かれた富田昌宏氏の『日本の「仕事の鬼」と中国の〈酒鬼〉～漢字を介してみる日本と中国の文化』出版記念講演会には約60人が参加、富田氏の話に聞き入った。

『日本の「仕事の鬼」と中国の〈酒鬼〉——漢字を介してみる日本と中国の文化』が日本橋報社から刊行されました。私は神戸市外国語大学の中国学科を卒業後、外務省に41年間在職し、アジア局中国課や国際情報局分析2課で勤務したほか、北京、広州、大連、マレーシア、ペナン、米国ニューオーリンズと外地勤務を歴任し、2004年から09年は在重慶総領事、09年から外務省外交史料館長を務め、11年3月に退官しました。この本は中国各地の公館で在任中に得た体験や情報などを基に執筆したもので、学者や研究者の本とは違った特色があります。最初の1、2章では日中両国の漢字文化の基本事項について述べ、3章以降は個別の話をとめました。

中国語の「協議」は「合意」の意味

最初に本書の執筆の原点となった、言葉についての新しい発見、困ったことなどについて簡単にお話したいと思います。私が初めて北京の大使館へ赴任したのは1973年7月。日中の国交が正常化され、大使館の建館から半年後でした。当時は日中のハイレベルの人物交流が多く、その通訳を務めました。また、日中間で四つの実務協定の締結交渉が行われ、航空協定だけは英語で交渉をしていましたが、その他の3協定は日本語と中国語を使っていたから、私はその通訳も担当していました。ある日、日

本側の団長の「本日の協議は有意義であった」という発言を中国語に通訳したら、先方から「今日は何も合意していない」という発言があつて困つたことがあります。中国語では〈協議〉は「合意」の意味で、この場合は〈協商〉と訳さなければいけなかつたのです。1974年4月には水野清建設相が訪中されて李鵬首相と会見、私が通訳しましたが、李鵬さんの通訳は現在の駐日中国大使の程永華さんでした。

これに先立つ1971年、在外研修で台湾に派遣され、台湾大学の大学院で国際法の勉強をしました。ある日、国際政治学の教授から中国語で、日本の政治家の「シゲル・ホリ」とは誰かとたずねられ、「保利茂です」と答えました。当時、保利茂氏は自民党の幹事長でしたが、日本のことをよく知っている政治学者でも、日本の国会議員の名前は漢字でしか覚えていないため、英語の論文に出てくると誰のことか分からなかつたということでした。日本語と中国語との間にはこのような問題があるのだと、初めて認識しました。日本と中国ではそれぞれ相手国の人名や地名などの固有名詞を自国の言葉で発音しています。日本人にとつて鄧小平は「とうしょうへい」であり、中国人にとつて芥川龍之介は「チエチュアン・ロンジチエ」で、これは現代では日本語と中国語の間だけで見られる特殊事情のようです。ある時、中国のAPCC（アジア太平洋経済協力機構）

担当大使に会つて中国語で自己紹介をしたら「あなたの名前は日本語では何と言うのか」と聞かれました。中国でも国際関係の仕事をしている人は日本人の名前の日本語読みを知つておく必要があると認識しているのだと改めて実感しました。

また、中国中央テレビの夜のニュース番組でアナウンサーが〈観衆朋友、晚上好〉（視聴者のみなさん、今晚は）と言うのを聞いて、なぜ視聴者が〈朋友〉（友達）なのだろうと違和感をもつたこともありました。

【漢字文化の歴史的背景】

4世紀に漢字が百済を介して日本に伝来し、日中のほか朝鮮半島やベトナムを含む漢字文化圏ができました。日本人には中学、高校の漢文の授業によつて唐詩など中国の古典文学に親しみを持つ人が多いですね。他方、中国語は時代の経過によつて古典と現代語との意義と用法に大きな違いができました。文語と口語の差異も大きいものがあります。

中国では1950年代から60年代にかけて社会主義の概念に関する新語が多数出現し、80年以降は改革開放によつて日本文化も流入し、新語が生まれました。日本では明治政府による新しい国づくりが進められる中で慶應義塾の創設者であつた福澤諭吉を中心に多くの学者が西洋の文化や

富田 昌宏 (とみた・まさひろ) 氏 1947年、大阪市生まれ。70年、神戸市外国語大学中国学科卒業、外務省入省。在中国大使館、在広州総領事館、在ペナン総領事館 (マレーシア)、在ニューオリンズ総領事館 (米国) 在勤。2001年、国際情報局分析第二課情報分析官。03年、アジア大洋州局中国課地域調整官。04年、在瀋陽総領事館大連出張駐在官。05年、在重慶総領事。09年、外交史料館長。11年、退官。中国関係の著書に『お金が語る現代中国の歴史』(三省堂)がある。

概念を取り入れるために多くの新語を作りました。それらの新語には経済、社会、哲学、計画、演説など今では日本人が外来語に起源を持つと全く意識しないで使っている単語が圧倒的に多いのです。新しい西洋の概念ですから、今ならばカタカナ言葉で取り入れるのでしようが、明治初期の先人は単に外来語を日本語に訳しただけではなく、漢字の発祥の地である中国の古典にも造詣が深かったので、新語にもそれを取り入れたものが多く現れました。例えば「経済」は中国の古典にある「経世済民」(世を治め民を救う)から作られた外来語です。ただし、全く新しい事物の中には当初漢字の音訳が創られたものの後にカタカナで置き換えられた言葉もあります。「倶楽部」が「クラブ」に、「瓦斯」が「ガス」になって定着したようなケースです。

中国でも辛亥革命(1911年)前後に西洋文化が流入し、多くの学者が西洋の文献を訳して外来語の新語を作り、古典にはない新しい概念は英語の発音を中国語で音訳したため、英語のサイエンス (science) が「賽因斯」、デモクラシー (democracy) が「徳莫克拉西」となりましたが、庶民には難しすぎて実用的ではありませんでした。このため、後に日本から入ってきた「科学」、「民主」を使うようになりました。日本で創出された外国語の訳語の多くは簡潔で意味を理解しやすいものだったので、国民に受け入れられ、生活の中に浸透しました。中国では今日使われている社会科学、自然科学、経済分野などの漢字熟語の70%以上が日本語を起源としたものだという調査結果があります。

中国の若者が使う「チョー感動的」

日本から取り入れたものをそのまま使って屈辱感はないのだろうか、と思う方がいるかもしれませんが、中国人は「漢字はもともと中国で創られ日本などの近隣諸国に伝わり漢字文化圏を形成したのであり、近代以降に日本の漢字が中国に入るのは漢字文化圏の中の双方向の交流を意味する。漢字はその文化圏が共有する歴史文明であり、これら外来語の語彙は文化を支える骨格に過ぎず、それを基礎として文化に栄養を与えて肉付けし文化を発展させること



『日本の「仕事の鬼」と中国の「酒鬼」』
漢字を介してみる日本と中国の文化

福田昌宏著

日本橋報社、税込み1944円

鄧小平訪日時の通訳を務めたベテラン外交官が日本と中国をつなぐ漢字文化の奥深い世界を軽妙に解き明かした。「協議」が中国では「合意」の意味で使われる言葉で、「販売」には悪いイメージが付着している。人間は人の世のこと。花をめぐる日本と、花のイメージが悪い中国。愛人は夫や妻のこと。愛人は情婦という。同じ漢字文化なので「お互い話せば分かるはず」といたくなるけれども、言葉の意味が違うことから生まれる誤解も多し。一読、日中の「理解」がそう簡単ではないから本腰を入れてかからないと意思疎通も出来ないと感じる人が多いかもしれない。読みやすく、日中文化比較の入門書としても活用できる。

こそが重要だ」と考えるようで、何ら違和感なく使用しています。それどころか、漢字文化圏の日本と中国の漢字表記の交流がその後も進み、今日では単語だけでなく言葉の言い回しにも影響が及んでいます。例えば、日本の若者の言葉でよく聞く「超面白い」などの「超(チョー)」が中国の若者の間で「超豪華」、「超動人(チョー感動的)」な

どと使われるようになっていきます。

【伝統文化】

観音菩薩信仰は中国で生まれた

この本の表紙の左上の写真は柴山大仏です。四川省の揚子江支流の岷江に面した峨眉^{がび}山地域の法相宗凌雲寺の弥勒菩薩で、90年をかけて建造され、高さ71^{トク}。唐末の803年に完成した、近代以前に作られた仏像としては世界最大の石仏です。完成当時は大仏仏閣に覆われていましたが、現在は露天で大仏しか残っていません。エキゾチックな顔立ち、巨大石仏というところから日本の大仏とは大きく異なります。仏教発祥の地である天竺(インド)の面影を残しているようです。また表紙の右下にあるのは牛久大仏で、茨城県牛久市所在の阿弥陀如来像です。1992年に建造されたブロンズ像で120^{トク}あり、人物像としては世界第3位の高さを誇っています。

仏教は紀元前2世紀に天竺から中国に伝来し、日本には538年に朝鮮半島を経由して伝来しました。観音菩薩信仰は8世紀に中国で生まれたものです。菩薩は慈悲をもって世を救う善と美の化身とされ、中国では古くから四川省遂寧市^{すいねい}にある広徳寺が中国の観音文化の発祥地とされています。2008年には中国文学芸術界聯合会(文聯)など

によって遂寧市が最初の「中国観音文化の故郷」と命名され、観光名所にもなっています。

バレンタインデーが年に3回ある？

次はバレンタインデーの話です。2006年は中国でバレンタインデーが年に3回あった年でした。中国ではセント・バレンタインズデーは〈情人節〉(恋人の日)と訳されています。他方、中国では漢の時代以来の七夕伝説がよく知られており、七夕こそが〈情人節〉とされています。中国には日本では知られていない牽牛(牛郎)と織姫(織女)のロマンチックな七夕神話があります。そのうえ06年は太陰暦では7月が閏月だったので、〈情人節〉が計3回あったことになったのです。旧暦では平年は1年が354日。19年に閏月が7回あります。

中国には「八仙人が海を渡り、それぞれ能力を発揮する」〈八仙過海、各顯其能〉という有名なことわざがあります。八仙人が招かれて現在の山東省から蓬萊仙山を訪ね、帰りにそれぞれ法器を使い、魔法の力を發揮して帰ったという話です。〈八仙〉は中国の神話上の人物ですが元々、全員が中国の實在の人物とされています。蓬萊は中国の東方にある海上の仙人の住む山で、日本または台湾の美称とされています。

一方、七福神は室町時代以来の日本の神話の神様です。

恵比寿だけが日本の神で、そのほかはインド、中国の神とされます。〈八仙過海〉の行先は日本で、〈八仙〉が日本へ行って七福神になったという伝説や、途中で1人海に落ちて7人になったという話もあります。

次は本の題名ともなっている「鬼」の話です。日本では元々山で暮らす異種の間人を鬼と呼びました。今日では「鬼ばばあ」のように、怖い人を形容するときに使うほか、「仕事の鬼」のように物事に精魂を込める人のことも鬼といっていますね。一方、中国では鬼は元々死者の亡霊をいいます。現代では〈日本鬼子、鬼子兵〉など日本人を貶すことばとして使ったり、〈酒鬼〉(酒浸り、アル中)などの用法もあります。鬼が亡霊から転じて、実際にいない人、誰もいない(nobody)のことを言う場合もあります。例えば次のような男女の会話が聞かれます。「僕たちは本気で愛し合っているんだよね」(我們真心相愛、是不是)、「あなたと愛し合っているのは鬼だけよ」(鬼才和你相愛呢)。また〈小鬼〉(悪戯っ子、可愛い子)、〈人小鬼大〉(子供だけど肝は大きい)のように全く悪くない、よい意味でも使われます。中国語の表現は多様です。

日中で180度違う「花」のイメージ

〈花〉は植物の花そのものを指す場合以外では、その形容する意味やイメージが日本語と中国語で非常に異なりま

す。日本語では「花嫁」、「花婿」の花は美しく立派なことを意味し、「花も実もある人生」、「花の三十代」の場合には華麗なことを意味します。ところが中国語で花は心の動きを表すことばです。〈男人花心〉の〈花心〉は花のようにきれいな心ではなく、男が女に気が多く目移りすることを意味しています。〈花花公子〉は「プレイボーイ」を意味する。現在では使われなくなりましたが、以前は〈花子〉や「牛耳る」などあまり良くない意味の語が多いのですが、中国語では〈牛〉〈非常牛〉は「すごい、すばらしい」の意味です。一方、亀は日本では「浦島太郎」や「兎と亀」の童話で模範的な生き物ですけれども、中国語では、口語で亀を〈烏龜〉〈王八〉と呼び、妻に浮気されている男のことも意味します。「亀の卵」を表す〈王八蛋〉は「馬鹿者」の意味です。

【中国指導者のことば】

2006年10月、当時の安倍晋三総理大臣（第1次政権）が日本の総理としては7年ぶりに中国を公式訪問し、中国側との間で小泉純一郎政権時代に靖国神社参拝問題で冷却していた日中関係を見直し、高度のレベルに高め「戦略的互惠関係」を構築することで温家宝総理との間で合意しました。温総理はその後の記者会見で、南宋の詩人辛棄疾の

詩の上の句「青山は遮りとどめず、畢竟東流し去る」〈青山遮不住、畢竟東流去〉を披露しました。これは山は大河の流れを止めることができないという意味で、日中関係発展の流れは留めることが出来ないことを表現したものです。しかし、この句の披露にはさらに深い意味が込められていたという話もあります。この詩の下の句は「河の夕暮れは余を愁いしめ、山深く聞く鷓鴣の声」〈江晚正愁予、山深聞鷓鴣〉と続きます。鷓鴣は雉の一種で、鳴き声が行ってはいけない、兄さん」〈行不得也、哥哥〉と聞こえるといわれています。温総理は、この下の句を借りて安倍総理に靖国神社に参拝しないよう密かに求めたのではないかという観測が報じられたのです。安倍総理は第1次政権では靖国参拝をしませんでしたが、7年後の2013年12月、第2次政権の総理として参拝しました。

「訪日して現代化が何かが分かった」と鄧小平

1978年10月に鄧小平氏が日中平和友好条約の批准書交換のために訪日しました。鄧氏は政府の公式行事に出席したほか、日産自動車の座間工場、新日鉄君津製鉄所、松下電器茨木工場を視察し、東京―新京都間は新幹線に乗車しました。日産の工場を訪問した際、要請を受けて「中日両国人民の友好協力の道は、進めば進むほど広がる。我々は共に努力しよう。」〈中日両国人民友好合作之路、越

走越寛広、我共同努力」と揮毫しました。新幹線に乗車した際には「速い、本当に速い。後ろから鞭で追い立てられているようだ。これこそが今我々が必要としている速さだ。我々は今走ることが必要だ」という感想を述べたといわれています。そして、帰国前には「今回の訪日で現代化とは何かが分かった」と発言したそうです。

その後、公務から引退し88歳の高齢になった鄧小平氏は1992年1月から2月、普通の党員の身分で南方の武昌、深圳、珠海、上海を視察し、各地で講和を行いました。南巡講和といわれるものです。1月29日に珠海の冷蔵庫工場で、この小さな町工場が過去7年間で生産量を16倍に増やし、全国1位になったとの話を聞いて喜び、語った言葉。「我が国は必ず発展しなければならない。発展しなければ馬鹿にされる。発展こそが絶対的な道理である」。この最後の部分「発展こそが絶対的な道理である」(発展才是硬道理)はその後、改革開放のスローガンとなり、街で見かけるようになります。

【現代社会のことば】

言葉は時代とともに変わります。中国語の変化について四つの例をあげてお話ししましょう。

まず、時代とともに価値観が変化した〈貴族〉と〈小姐〉(お嬢さん)の話です。

「小姐」はもともと上品な言葉だったのだが：

社会主義革命後、中国では〈貴族〉は「死に瀕した没落した階級」(垂死没落的階級)とされました。しかし、改革開放後は「貴族」が豪華なものを形容する語となり、〈貴族学校〉や〈貴族車〉などの言葉が生まれました。一方、〈小姐〉は、旧い社会では〈少爺、小姐〉(坊ちゃん、嬢ちゃん)などと上流階級の子女の意味で使われましたが、改革開放後にはウエイトレスに対する呼び名としても使われるようになり、その後、夜の街では〈三陪小姐〉(男の酒、歌、踊りの相手をする女)という言葉が出現して、そのイメージが激変しました。女性店員が女性客に〈小姐〉と呼びかけると〈你才是小姐呢〉「あんたこそ小姐のくせに」と返事が返ってくる場合があります。

次はイメージキャラクター。イメージキャラクターと言えば、従来はタレントが多かったのですが、今日では地方自治体のイメージキャラクターをはじめ、アニメのキャラクター(ゆるキャラ)が多くなっていますね。イメージキャラクターは中国語では〈形象代言人〉といえます。本来、発言しないイメージのはずで、その趣旨は「姿、形をして語らしめる」ということのようにです。

わが国では、ゴールデンウィークといえば、4月末から5月初めにかけての大型連休です。一方、中国では

1999年から、「春節」（旧正月）、「労働節」（メーデー）、「国慶節」の3回、それぞれ3日間の法定祝日と前後の土、日曜および振替休日をあわせて、年3回各1週間の「黄金週」が設定されました。その後、その他の伝統的な節句も祝日にすべきだという意見もあって、また連休は交通の混雑が激しくなったため、10年後の2008年に廃止されました。しかし、中国の「黄金週」はその規模の大きさと変更の早さで際立っていました。

猪（亥）年は中国では、豚（猪）年

中国語（漢語）の方言では広東語と福建語が最も標準語との違いが大きい言葉です。北部の黄河流域の干魃と水資源不足を解消するため、1978年から建設が始まった南部の長江（揚子江）から北部の黄河まで三つの水路を建設して水を運ぶプロジェクトがあり、これが「南水北調」と呼ばれます。他方、1997年の香港の中国復帰以降盛んになった、中国大陸の資金の香港への投資を意味する「北水南調」という言葉が香港で使われるようになりました。広東語の「水」には水という意味のほかは財産、金銭という意味もあります。このため、広東省では「猪年」（中国では猪は豚の意味なので、日本流に言えば豚年）に「豚小屋に水（金銭）が流入して大変おめでたい」（猪籠入水、吉祥得俚）ということばが使われます。広東省では、籠に

豚が乗った縁起ものの陶器の置物もみられません。
（2014年6月3日、東京駅近くの八重洲ブックセンター本店ギャラリーで行われた講演会の速記録。文責・編集部。一部敬称略）